

演技する死体

デビル7

春日信彦

自白

コロンダ君は最近立て続けに起きる悩み事に気がめいていた。一つ目は、お菊さんによる結婚妨害、二つ目は、人生を大きく変えることになる転職。父親が、自民党議員の弁護士として有名なC弁護士事務所の弁護士になることを勧めていた。さらに、次には衆議院議員になる道を勧めていた。これは父親の道と同じであった。三つ目は、T高校時代のときの同級生の殺人事件であった。転職は、確かに重大な問題ではあったが、同級生の殺人事件のことが、頭から離れなかった。

この殺人事件は、単純なものであった。自首してきた被告人、前田アツ子(29歳)が、浮気を原因として夫、前田誠(34歳)を睡眠薬で眠らせ猟銃で殺害した事件であった。前田誠は、参議院議員に自民党から比例代表で当選していた。彼は元総理の外戚に当たり、今後が期待されていた。事件は、TVで取り上げられたが、殺意が明確で世間をにぎわすことはなかった。殺意の原因は夫の不倫であったが、不倫の具体的内容については、まったく報道されなかった。内容が、明確になされなかったのか、明確になった内容が問題になるため、政界がマスコミの口封じをしたのかは定かではない。

当事件において、自白による殺人動機と猟銃による射殺に一切の問題点は見出されず、速やかに起訴された。ただ、一つだけ不可解な点は、公判において本人が自ら重刑を望んでいる言動が見られたことだ。射殺に対する反省はまったくなく、今でも夫を憎んでいると法廷で述べた。また、検察官の質問に対しても、被告人は裁判長の心証を害する回答に終始していた。

いつものように、丈の短い浴衣姿のコロンダ君が書斎でぼんやりしていると、下着をつけず浴衣だけのお菊さんが、冷たいジャスミンティーを運んで入ってきた。中央の丸テーブルにお茶を置くと、声をかけた。「坊ちゃん、どうなされましたか？最近、元気がないようですが。笹子のことでも考えていらっしゃるんでしょ？潔く、あきらめられてはどうです？そう、素敵なお見合いの話があるんですよ、坊ちゃん」お菊は財務大臣の孫に当たる令嬢とのお見合いの話を持ってやってきた。

いつもであれば、即座にテーブルにやってきて、顔を真っ赤にしてお見合いの話を断るのであったが、今日の彼は、反抗する元気もなかった。高校時代の彼女の殺人事件が頭から離れず、目が落ち込むほど気がめいていた。法律的にはまったく問題点のない殺人事件であったが、コロンダ君にとってはすべてが納得いかなかった。温厚でやさしかった彼女が、殺人を犯すとはどのように考えても、理解できなかった。

今では、自分の思考と感性までも自信を失っていた。「坊ちゃん、こちらにいらしてくださいな。ほら、素敵なお嬢さんじゃないですか」お菊さんはお見合い写真を広げてニコッと笑顔を作った。コロンダ君はゆっくりと席を立つと幽霊のように静かに床をするように歩き、テーブルの席に着いた。コロンダ君は、お見合い写真には一瞥もせず、お菊さんに声をかけた。「悪いけど、それ、しまってください。今は、そんな気にはなれないんですよ。ちょうど、よかった、僕の話聞いてくださいますか？」死んだ魚のような目でお菊さんをじっと見つめた。

少し青ざめた顔に落ち込んだ目のコロンダ君を見たお菊さんは、心配そうに返事した。「どう、なさいました？どこか具合でも悪いんですか？」お菊さんはコロンダ君をじっと覗き込み顔色をうかがった。コロンダ君は亡霊がしゃべるかのようにゆっくりと話し始めた。「もう、僕はすべてに自身をなくしました。今まで築きあげてきた人間観がすべて崩壊してしまいました。いったい、これから僕は何を考え、何を信じて生きていけばいいかわからなくなりました。もう、生きる気力さえないんです」コロンダ君は、悪魔に魂を盗み取られた精神病患者のように、今にも自殺しそうな顔つきだった。

今までにない悲壮で深刻な表情のコロンダ君を見たお菊さんは、すぐに病院に連れて行くことを考えた。「坊ちゃん、大丈夫ですか、すぐに救急車を呼びますから、ベッドに横になってください」お菊さんは、すっと立ち上がるとコロンダ君の左横に立ち、右腕をコロンダ君の脇に入れた。コロンダ君のうめくような声が飛び出した。「待ってください。僕は病気じゃありません。人間不信に陥っているだけなんです。僕の話聞いてください」コロンダ君は、弱弱しい声で訴えた。

お菊さんは啞然とした顔でコロダ君を見つめると、元の席に腰掛けた。「坊ちゃん、どうなさいました？お菊をびっくりさせないでください。本当に大丈夫なんですね。坊ちゃんの心配事って何ですか？お菊によくわかるように、話してみてください」お菊は、コロダ君を癒すようにやわらかい笑顔を作った。コロダ君は、少し困った顔をしてつぶやいた。「どのように話していいか、僕にもよくわからないんです。でも、僕の人生にかかわることですから、お菊さんの力を借りたいと思います」コロダ君は大きく深呼吸して、ジャスミンティーを一口すすり話し始めた。

「お菊さんも、すでにニュースで知っていると思うけど、参議院議員の射殺事件のことなんですけど、自首してきた前田アツ子は高校時代の友達なんです。彼女が、猟銃でご主人を殺したなんて、どうしても信じられないんです。これって、本当のことなんですか？僕には、どうしても受け入れられないんです。お温厚な彼女が、たとえ、浮気を知って、かっとなったとしても、猟銃でご主人を殺すなんて、こんなことがありえるのでしょうか？」コロダ君は心のわだかまりを吐き出すようにお菊さんに問いかけた。

お菊さんもゆっくりと深呼吸して、思慮深く回答した。「坊ちゃん、お気持ちはよくわかります。高校時代の彼女が殺人をするなんて、信じられないのはごもっともです。でも、人って言うのは、時間とともに、環境によって、変化するものです。彼女の気質は温厚だと思います。でも、ご主人の浮気を知って、激情し犯行にいたったと考える筋が通ります。男と女の事件は、理屈では理解できないものなんです。人間の嫉妬というものは、この世でもっとも恐ろしいものですよ、坊ちゃん」嫉妬による殺人事件は、巷にごろごろしていると、あっさりと言った。

コロンド君の顔がさらに青くなってしまった。指を震わせながら、コロンド君は反論した。「お菊さんのおっしゃることはもっともです。僕も、嫉妬による事件をいくつも知っています。でも、でもですね、彼女は、違うんです、本当に、心優しい人なんです。理由にはならないとは思いますが、彼女はクリスチャンで、信心深い人なんです。それと、このことがもっとも僕の気にかかっていることなんです、彼女は妊娠していたのです。こんな彼女が、殺人を犯すでしょうか？」コロンド君は、妊娠していたことをお菊さんに教えた。

お菊さんは、寝耳に水の顔をして、叫んだ。「え！妊娠！妊娠していたんですか？ニュースでは言っていなかったわね。妊娠していたとなると、ちょっと、ややこしくなるわね。子供ができたとなれば、女には母性本能が働くわ。どんなに殺意があっても、子供のために、殺人行為を押しとどめると思うわ。離婚に踏み切っても、殺人はしないと思うわ。お菊もわからなくなってきたわ」お菊さんは、妊娠と聞いて頭が混乱し始めた。

コロンダ君は、お菊さんの気持ちが動いたことにほんの少し元気が出てきた。「でしょ、でしょ、妊娠していた彼女が、殺人をするとは考えられないんだよ。お菊さんもそう思うだろ。彼女の自白は嘘じゃないだろうか？」コロンダ君は、お菊さんのひらめきに期待した。お菊さんは、苦虫をつぶしたような困り果てた表情をすると、頭を整理するように話し始めた。

「ちょっと、頭がすっきりしないんだけど、仮によ、もし、彼女が殺していないとすれば、真犯人がいるということになるわね。でも、彼女は自分が殺したと自白した。と、言うことは、彼女は真犯人をかばっていることになるわね。彼女がかばわなければならないような人とは誰か？ そんな人いるかしら？」お菊さんは、困り果てた顔で、腕を組み天井を見つめた。

コロンダ君も、腕を組んで、しばらく考え込んだ。突然、お菊さんが、うなり声を上げた。「う～～！坊ちゃん、殺意の原因は、ご主人の浮気でしたよね、でも、これが逆に、彼女が浮気をしていたとしたらどうかしら。つまり、真犯人は、浮気相手じゃないかしら。そう考えれば、つじつまが合うわ。彼女は、浮気相手である真犯人をかばって、自分が殺したと、自白した。あくまでも、お菊の妄想よ、怒っちゃいやよ」お菊はコロンダ君の反応をそっと横目でのぞくように見た。

コロンダ君は、かなりムカついたが、お菊さんの妄想に感心した。「お菊さん、さすがですね。警察も、このことを考えたみたいですよ。彼女の男性関係も極秘に調査したみたいですが、まったく、不審な男性関係はなかったそうです。僕は、これを聞いてほっとしたんです。もし、彼女が不倫していたら、気が変になって、病院に行くことになっていたでしょう。だとすれば、いったい、誰をかばっているのか？」コロンダ君は、真犯人は他にいると信じていた。

お菊さんは、肩を落とし、上品にジャスミンティーを一口すすった。いつもひらめく、妄想がなかなか出てこなかった。コロンダ君も考えが行き詰まり、両手で両ほほをパチンと叩いた。コロンダ君は、心でつぶやいていた。彼女は犯人ではない。きっと真犯人がいる。彼女は誰かをかばっている。いったい誰だ。真犯人出て来い。お菊さんは、しばらくコロンダ君の顔色をうかがっていたが、あまりにも真剣な顔で考え込んでいることにあきれ果てた。

「坊ちゃん、話は変わりますが、この辺で、妄想ごっこはやめましょう。坊ちゃんは、小説家には向いていません。もっと、現実を見つめてください。政治家になる心構えを身に付けてください。最近、坊ちゃんは感傷的になっています。それというのも、小説ばかり書いているからです。この辺で、小説家の夢を捨てて、まず、弁護士になってください。そして、国務大臣、さらには、総理大臣を目指してくださいませ。それが、男というものですよ」お菊さんは、コロンダ君に、発破をかけた。

突然、現実的な話に面食らったが、冷静に答えた。「お菊さん、何度も言っているように、僕は政治家には向いてないんだ。お金だとか、権力だとか、そんなものは、僕には必要ない。僕が望むのは、平凡な生活だ。まして、小説家になりたいとも思っていない。小説を書くことは単なる慰めに過ぎないんだ。お菊さんは、僕のことをかなり誤解している。この際、はっきり言わせてもらうよ」コロンダ君は、お菊さんの執拗な説得に辟易していた。

お菊も負けてはいなかった。コロンダ君を政治家にするという決意は鋼鉄のように硬かった。両腕を組み、じっとコロンダ君に目を据えると、口から炎を吐き出すように熱く語り始めた。「坊ちゃん、男の魅力とは何ですか？お金と権力じゃないですか。男は天下を取るために生まれてくるものなのです。豊臣秀吉を見てください。あの心意気ですよ。総理大臣を目指してこそ、男です。女々しい男で一生を終わってはなりません。お父様は嘆き悲しまれます。いいですね、坊ちゃん、天下を取るんです。お菊も、坊ちゃんのためなら決死の覚悟です」お菊は、浴衣から溢れ出んばかりのふくよかな胸を右手でぽんと叩いた。

コロンダ君の目がお菊さんの胸に釘付けになった。目の前の豊かな白い乳房が目につきささった。一瞬、生唾を飲んでしまった。お菊さんはほんの少し微笑むと、胸元にそっと手を置いた。「坊ちゃん、モトカノのことなんか忘れて、お見合いなされてはいかがですか。素敵なお嬢様を探してまいりましたのよ」お菊さんは、さらに錯乱攻撃を続けた。両手で胸元をグイット持ち上げドスンと落とした。

コロンダ君は、お菊さんの最近の行動にはあきれていたが、性本能の興奮は抑え切れなかった。ブルンとゆれる白い肌を見た瞬間、右手は股間を押さえていた。「お菊さん、話をそらさないでください。今は、お見合いの話はやめてください。事件の真実を解明したいのです。お菊さんだって、不審に思ったじゃありませんか。妊娠した女性は殺人なんかしないって。僕も、そう思うんです。きっと、真犯人がこの世のどこかに隠れているはずです。二人で犯人を捜しましょう」コロンダ君は、真犯人探しをほのめかした。

お菊さんは、胸元の谷間にコロンダ君の視線が飛び込むように前かがみになり、両肘をテーブルに着いた。ほんの少し胸を左右に揺らすと、ゆっくりと話し始めた。「坊ちゃん、彼女の殺人罪は確定したも同然です。明白な殺意を持った自白があるのです。いまさら、どうしようって言うんです。現実を見つめるのです。しっかりと。信じたくはないでしょうが、彼女が殺したんです。真犯人は彼女です。これでいいのです。わかりましたか」お菊さんは、コロンダ君の妄想癖にパンチを食らわした。

自殺説

コロンダ君は、お菊さんの色香に惑わされ、一瞬ひるんだが、突然思い浮かんだひらめきを話し始めた。「お菊さん、こんなことは考えられないだろうか？確かに、彼女は誰かをかばっている。当然、かばう相手は最愛の人。つまり、その人はご主人なんだ。これは他殺じゃなくて、自殺だった、彼女は自殺を他殺にすり替えたんじゃないだろうか。前田誠は、自殺しなければならぬ何らかの事情があった。でも、自殺の原因を警察に捜査されると困るから、妻のアツ子に殺人者の演技を遺書に書き残した。お菊さん、どう思う？」コロンダ君は、奇想天外な話をした。

お菊さんは、自殺と聞いて、突然マジな顔つきに変貌した。このような逆転のひらめきをしたコロンダ君に驚くと同時に、ほんの少し感心した。お菊さんは身体を起こすと、両腕を組んで大きく頷いた。「坊ちゃんにしては、すばらしいひらめきじゃありませんか！自殺の線も考える必要がありましたね。お菊は、他殺のことしか考えていませんでした。もし、自殺だとしたら、彼女の自白をどのように解釈すればいいのでしょうかね」お菊さんは、自殺と自白がまったく結びつかないことに頭を痛めた。

コロンダ君はドヤ顔で今話したことを繰り返した。「だから、今言ったじゃないですか。自殺の原因を警察に知られたくなかったんですよ。だから、彼女に他殺を依頼したんですよ。でも、彼女を殺人犯に仕立て上げなければならないような、警察に知られたくないような自殺の原因ってあるんだろうか？」コロンダ君は、自分のひらめきに自信がなくなってしまった。お菊さんは、じっと耳を澄まして話に聞き入っていたが、目を大きく見開くと、刑事のような理詰めの口調で話し始めた。

「坊ちゃん、確かに、自殺の線を考えられたことはすばらしいと思います。でも、前田誠は、愛する妻に殺人犯になることを依頼するでしょうか？しかも、彼は、妊娠していたことを知っていたはずですよ。妻と子供を不幸にしてまで、隠さなければならない自殺原因があるでしょうか？お菊には、考えられません。ただ、女の第六感ですが、彼女は、犯人じゃないと思います。また、誰かをかばっているようにも思えません。考えられることは、やはり、自殺だと思います」お菊は、考えれば考えるほど、この事件がわからなくなっていた。

コロンダ君は、自殺に賛成してくれたことにうれしくて話を続けた。「彼女は、殺していないんです。犯人じゃないんです。自殺した前田誠に頼まれて、射殺したと自白したに違いありません。自殺した原因さえわかれば、彼女の自白の謎かすべて解けるはずです。でも・・・」コロンダ君は、どうすることもできない事態に愕然とした。自殺の原因は、彼女しか知らないはずだからだった。コロンダ君は、悲鳴を上げながら両手で頭の髪をかきむしった。

お菊さんは心の中でつぶやいていた。他殺にしなければならないような自殺の原因って、いったいどんなことか？いや、彼女、彼の妻が犯人でなければならないような原因とは？そんな原因があるのだろうか？お菊さんも、行き詰っていた。「坊ちゃん、お菊も降参です。彼女が殺人犯を名乗り出るような、そんな自殺の原因なんて、まったく、思いつきません。だからといって、不倫が原因で彼女が夫を射殺したとは考えられません。やはり、自殺の線は、確かだと思います。解明する方法はただ一つ、前田アツ子に聞くしかありません」お菊さんも、白旗を揚げた。

コロンダ君は、今にも息が途絶えるような細い声で話し始めた。「お菊さん、お菊さんにしては、無謀な結論を出しましたね。彼女が、本当のことを言う程度のことだったら、殺人犯になるような自白はしなかったと思いますよ。彼女は、死んでも口を割らないと思いますけどね」コロンダ君も、彼女が本当のことを話してくれることを何度も願っていた。できれば、直接会って、真実を知りたいと思っていた。

お菊さんは、この事件の真実は明らかにされないと思った。きっと、自白が証拠となり彼女は有罪になると確信した。でも、彼女が最愛の夫を嫉妬から射殺するとは到底思えなかった。コロンダ君は、当初から彼女の自白は嘘と思っていた。お菊さんとコロンダ君は自殺と考えたが、これを証明することはできないと思った。自白を撤回しない限り、彼女の射殺が事実となってしまう。コロンダ君は、右手の拳骨で頭をゴツンと叩いた。

コロンダ君は苦虫をつぶしたような顔を見ると、急に思い出したように話し始めた。「前田誠は、睡眠薬を飲んでいましたね。猟銃で自殺するのに、睡眠薬を飲みますかね？」お菊さんに疑問を投げかけた。お菊さんは、このことについてすでに考えていた。「坊ちゃん、まさに、睡眠薬こそ、他殺に見せかけるための策謀ですよ。“睡眠薬で眠らせ、射殺した”これは誰もが信じる他殺方法じゃないですか。彼は、嘘を演じてくれる妻のために、睡眠薬を飲んで自殺したに違いありません」お菊は、断定的口調で話した。

コロンダ君は、大きく頷き、お菊さんの推理に感激した。「さすが、お菊さん、何度も言いますが、お菊さんは、小説家になれますよ。いつもお菊さんのひらめきと推理には、感心しています。お菊さんのおっしゃるとおり、他殺に見せかけるために前田誠は、睡眠薬を飲んだに違いありません。ますます、前田誠の自殺の線は、堅くなりましたね。でも、どうやって・・・」またもや、コロンダ君は、頭の髪を両手でかきむしった。

お菊さんは、推理が行き詰ると、異常にムキになるところがあった。お菊さんの顔が少し紅潮しはじめていた。お菊さんは、自殺についてもっと深く考えるべきじゃないかと思った。「坊ちゃん、自殺は誰のために、するんでしょうか？」コロンダ君に当たり前のような質問をした。コロンダ君は、それは愚問でしょう、というような顔で答えた。「自分自身が苦しみから逃れるために自殺するんじゃないですか」いとも簡単に答えた。

お菊さんは、常識人の回答に大きく頷いた。「簡単に言えば、自分のために自殺するわけですね」念を押すように質問した。コロンダ君は、二度頷いてはっきりと答えた。「そのとおり、自殺は自分のためにするものです。自分が楽になりたいから、自殺するのです。間違っていますか？」コロンダ君は少し怒ったように答えた。お菊さんは、大きく頷き、右手をあごの下に当て話し始めた。

「一般的な自殺は、きっと、自分が楽になるためでしょう。それと違った、自分以外の人のために自殺するということはないでしょうか？たとえば、最愛の妻の幸せのために、自殺するということはないでしょうか？」コロンダ君の目を見つめた。「え！それって、保険金のことですか？」コロンダ君は、この事件にはまったく当てはまらないように思った。お菊さんは、右手を顔の前でひらひらと振ると、さらに、核心的なことを質問した。

「いいえ、お金ではありません。夫が自殺することによって、妻が幸せになり、さらに、妻を犯人に仕立て上げ、自殺を他殺に摩り替えることによって、妻が幸せになる。こんなことって、あるでしょうか？」お菊さんの妄想はフル回転していた。コロンダ君は、お菊さんの言っている意味がさっぱりわからなくなっていた。「お菊さん、意味がさっぱりわかりません。常識人の僕にもわかるように話してください。頭が、こんがらがってきました」コロンダ君は、またもや、両手で頭の髪をかきむしった。

お菊さんは残りのジャスミンティーを飲み干し、大きく深呼吸した。そして、目を閉じしばらく沈黙した。何か、ひらめきがあったのか、目を大きく見開くと話し始めた。「坊ちゃん、お互い、気がめいってますね、ここで、推理を進めていくために、私たちの仮定を明確にしましょう」お菊さんが話し終わるとコロダ君は大きく頷いた。「僕もそう思っていたんだ。頭が変になってきたからね」コロダ君は、お菊さんの話をじっと待った。

「私たちは、前田アツ子の自白は嘘だ、と考えました。そこで、一つ目の仮定は、前田アツ子は夫、前田誠を殺していない。二つ目の仮定は、前田誠は殺されたのではなく、自殺した。この二つの仮定に従っていろいろ考えてみました。仮に、自殺だとして、なぜ、妻、前田アツ子は、“自分が殺した”、と言ったのか、このことは今のところ解明できない。そこで、お菊の結論は、殺人犯になることが、“前田アツ子にとって得になる”、といえる何かがあるのではないか、ということです」遺言で夫に殺人犯になることを依頼されたとしても、殺人犯になることが、“前田アツ子にとって得になる何かがある”から、彼女は殺人犯になる決意をした、とお菊は考えた。

コロンダ君は、真剣に耳を傾けていたが、まったく理解できないお菊さんの結論に啞然とした。「殺人犯になることが、得になる。いったい、どういうことですか。刑務所にぶち込まれることが、どうして得なんですか？まったくわかりません」コロンダ君は、こめかみを親指でグイッと押した。お菊さんは大きなため息をついて話し始めた。「坊ちゃん、殺人犯になることが、なぜ、彼女の得になるのか、理由はわかりません。でも、これ以外に、彼女の心理を説明できないのです」言い終えたお菊さんは、ガクンとうなだれた。

コロンダ君は、元気をなくしたお菊さんが、気の毒になってきた。「お菊さん、僕が、つまらないことを話したばかりに、すみません。どんなに考えても、この事件は、僕たちにはどうすることもできないのです。彼女の幸せは、彼女が決めることです。後は、神に祈りましょう」コロンダ君は、うなだれたお菊さんの肩にそっと右手を置いた。「殺人犯を名乗り出るなんて・・・神様、彼女をお守りください」お菊さんは、両手を組み神に祈った。

遺書

コロンダ君は、彼女の気持ちを理解できない自分が情けなかった。また、殺人犯を名乗り出なければならぬような重大な事件が、誠とアツ子の間にあったに違いないことは推測できたが、じっと、何もせずに傍観している自分が齒がゆかった。「お菊さん、このままじっとしているなんて、僕にはできません。彼女のことを知る手がかりは、ないものですかね」お菊さんのひらめきに期待した。

お菊さんは、すっと立ち上がると、二つのティーカップを載せたトレイを持って部屋を出て行った。コロンダ君は、愛想をつかされたと思い、テーブルに突っ伏してしまった。しばらくすると、お菊さんが缶ビールを二つとグラスを二つ、トレイに乗せて戻ってきた。腰掛けると、缶ビールをコロンダ君に手渡した。「坊ちゃん、ビールでも飲んで、気分転換をしてください。今回の事件は、あまりにも難解すぎます。二人の頭では、無理ですね。頭がダメなら、足で、考えりゃいいじゃないですか、プチ旅行でもしましょうか」お菊さんは、缶ビールをグラスに注ぎ、気持ちよさそうに喉を鳴らして一気に飲み干した。

コロンダ君も無性にビールが飲みたくなった。缶ビールを勢いよくグラスに注ぎ、あふれる泡を吸い込むように、目をつぶって一気に飲んだ。「あ～～、気持ちいい！お菊さん、どこに旅行しますか？」コロンダ君の気分は、田舎の山奥にでも行きたい気分だった。上唇に泡をつけたお菊さんは、フーといきを吐き、問題が解決したときの落ち着いた表情で話し始めた。「彼女に兄弟はいませんか？まず、兄弟からあたって見ましょう」言い終えると、お菊さんは、二杯目を一口飲んだ。

コロンダ君は、弟がいることを知っていた。でも、どこに住んでいるかは知らなかった。「弟がいるよ。でも、どこに住んでいるかはわからないけど、あ、そうだ、弁護士に聞いてみよう」コロンダ君は、早速弁護士に電話した。お菊さんは、兄弟から何か手がかりがつかめると思っていた。「お菊さん、わかったよ、福岡市の博多区に住んでるだって。さっそく行ってみましょう」コロンダ君は、いても立ってもいられなかった。

コロンダ君は、弟、渡辺良一に連絡を取り、翌週の土曜に福岡に出立することにした。早朝、福岡空港に到着すると、タクシーを拾い、運転手に行き先を伝えた。「博多区の浦田1丁目にある、サンライズIIって言うマンションに行ってください」運転手は、頷いて空港通りを南に走った。プール入り口を左折して、左手の総合プールを通り過ぎ、右手の学習塾飛鳥練成館を通り過ぎると、左手に目当ての高層マンションがそびえて立っていた。

二人は、車を降りると、玄関のボタンを1010と押し付けた。「こんにちは、的野です。朝早くから、申し訳ありません」二人は、ドアが開くと、エレベーターにかけて行った。1010号室を軽くノックすると、サーファーのような浅黒い青年が顔を出した。「どうぞ」青年は、面長の顔に笑顔を作り、中に手招きした。リビングに案内された二人は、ブルーとホワイトのチェックのテーブルに腰掛けた。

コロンダ君は、どのように話を切り出していいか、迷っていたが、とにかく世間話をすることにした。「ぶしつけに、お邪魔して申し訳ありません。前田さんとは、高校時代の同級生で、演劇部でも一緒でした。僕は、今回の事件は、何かの間違いじゃないかと思っているんですが、ニュースを聞いてびっくりしています」コロンダ君は、話し終わると、お菊さんの顔をのぞいた。

良一は二人の前にグラスを置くと、フレッジからビンビールを一本取り出し、ビールを注いだ。彼も手酌でビールを注ぎ、二人の向かいに腰掛けた。彼は慚然とした表情を作ると話し始めた。「自業自得ってやつです。僕は、反対したんだ。将来、政治家になるようなやつと結婚しても、ろくなことはない。やっぱ、俺の言ったことは当たっていた。姉が人殺しをするはずがない。でも、自白しているから、しょうがないけど」言い終わると、どうぞと言って、彼は一気にビールを飲み干した。

二人も、グラスに口をつけ、ほんの少しビールを口に含んだ。「渡辺さんは、結婚に反対されていたんですね。でも、お姉さんとは、仲がよかったんでしょ。高校のとき、水泳部の弟さんのことをよく話されていました。いくつも賞を取られたと聞いています」コロンダ君は、弟の機嫌をとることにした。良一は、手酌でビールを注ぐと、グイッと一口飲んだ。「いまさら、愚痴をこぼしてもしょうがない。これが、姉の運命だろうさ」話し終わると席を立ち、ワインレッドのサイドボードの中に立ててあった、単行本を取り出してきた。

良一は、ピンクの輪ゴムのかかった単行本を、コロンダ君の前に差し出した。「これは、姉が真夜中にやってきて、的野さんが尋ねてきたら、渡してくれって、おいていったんです」コロンダ君は、単行本の表紙をじっと見つめていた。そこには、“罪と罰”と書かれてあった。コロンダ君は、輪ゴムを取り、本を開くと、分厚いしおりのようなものが挟まれていた。それは、折りたたまれた便箋だった。

“罪と罰”が目に飛び込んできたとき、あのときの情景が走馬灯のように目の前にあらわれていた。ラスコーリニコフを演じた秀文、ソーニャを演じたアツ子、コロダ君の心に永遠に残る思い出であった。コロダ君にとって、あのときの演技は、今でも胸を熱くさせた。「良一さん、お姉さんと一緒に、罪と罰を演じたんです。今でも、いい思い出です」コロダ君は、彼女からの伝言と思って便箋をそっと開いた。

コロダ君は、便箋に目を落とし、しばらくすると、手が震え始めた。そして、お菊さんに便箋を手渡した。その便箋は、遺書であった。お菊さんも、しばらくすると顔が青くなった。良一は、二人の変化に驚いて、訊ねた。「いったい、なんと書いてあるんですか？」良一は、便箋を覗き込んだ。お菊さんは、便箋をぐるりと回すと、良一に手渡した。良一は、便箋を少し目に近づけ、一心に文字を追った。

*アツ子、許してくれ、俺は限界に来た。もう、これしか、お前を守る方法はない。信じられないだろうが、俺とアツ子は、CIAの獲物となってしまった。彼らは、俺を将来総理大臣にする。そして、アツ子をデビル7の生贄に捧げると通告してきた。彼らの通告は必ず実行される。一刻も早く、アツ子を保護しなければ、いつ拉致されるかわからない。アツ子を守る方法を何度も考えたが、残忍な彼らからアツ子を守るには、国家に守ってもらう以外ないと判断した。

*俺は、睡眠薬を飲んで猟銃で自殺する。アツ子には、“睡眠薬を飲ませて、猟銃で射殺した”、と自首してほしい。こんな方法でアツ子を守ることは、最低な者がすることと思うだろうが、許してくれ。アツ子と生まれてくる子供のためにできることは、これしかなかった。アツ子、愛している。死んでも、アツ子を守って見せる。俺は、永遠にアツ子のそばにいる。

演技する死体

<http://p.booklog.jp/book/74697>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/74697>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/74697>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ